様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０３５４

研究課題名（和文）近世琉球の自意識と中国・日本

研究課題名（英文）The Kingdom identity in early modern Ryukyu between China and Japan

研究代表者
渡辺　美季（Watanabe, Miki）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：６０５４８６４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世期（1609～1879年）の琉球が、中国・日本へ二重に臣従しながらも、王国としての自意識を強化したことに着目し、この時期の琉球王国の自意識の在り方と中国・日本との国際関係との相関性を検討しようと試みるものである。この目的に沿って、王府および家臣団による王国の自意識に関する記録を分析し、この自意識に＜中国・日本への臣従＞の動向がどのような影響を及ぼしたのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：This research notices that early modern Ryukyu (1609-1879) strengthened its identity as a kingdom for all its dual submission to China and Japan and attempts to discuss the correlation between Ryukyuan identity and its relations with China and Japan. For this purpose, I surveyed how the government and vassals described the kingdom identity and examined how the identity was influenced by the movement of Ryukyu's subordination to its larger neighbors.

研究分野：琉球を中心とした近世東アジア国際関係史

キーワード：琉球　自意識　国際関係　東アジア

１．研究開始当初の背景

近世の琉球（1609-1879 年）は、中国（明清）との冊封・朝貢に基づく君臣関係を有しつつ、日本（薩摩藩および徳川幕府）の支配下に置かれていた。一方、近世は琉球が中国・日本の影響を様々な形で消化しながら、同時に自らの主体性を模索し、自意識とアイデンティティを強化した時代でもあった。中・日に強く挟まれるという状況ゆえに、かえって中国にも日本にも吸収されない、そのどちらとも異なる自己像が追究され、自覚されることになったのである。すなわち近世の琉球では＜中・日への「臣従」＞と＜自意識の強化＞という一見相反する現象が同時に進行していたと言える。従ってこの両現象の相関性を考察することにより、近世琉球の特質、ひいては近世東アジアの国際関係の構造の一端を明らかにし得ると考えられる。

＜中・日への「臣従」＞と＜自意識の強化＞との相関性に関する研究は手薄だが、これを初めて本格的に論じた研究としてグレゴリー・スミッツ（Smits, Gregory）の『琉球王国の自画像（*Visions of Ryukyu : Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics*）』（1998 年）がある。この研究の中でスミッツは、近世琉球の四名の知識人（主に為政者）の描く自国像が中国と日本の狭間で揺れ続ける様子を分析し、琉球が「想像の共同体」であったことを示した。ただし自意識の全体像や多様性―琉球社会内部の階層差や国内における地域差―に関しては未解明な点が多く、また中国・日本との接触・交流・外交の場で琉球の自意識が実際どのように発揮され、中国・日本側にどのように受け止められたのかといった「実態」―現実的な影響力―も十分に考察されていない。

私は 2009～2010 年度に受けた科学研究費（研究活動スタート支援、研究課題「家譜から見た近世琉球の国際関係と東アジア」）において、近世琉球の国際関係を直接的・間接的に担った個々の人々に着目し、彼らの家譜を主な史料として、個人史の＜束＞として琉球の国際関係を捉えようと試みた。その過程で私は、家譜に記された一族の由緒や祖先の功績の中に、①中国や日本との関わりを示す記述が多く含まれていること、②そこには王府主導の自意識（国家アイデンティティ）が強固に反映された記述が含まれていること、③一方で王府の描く自意識とは異なる個々人や家の自意識に関わる記述も散見されることに気づいた。また①～③で確認できる自意識の形成過程は、家譜に収録された個々人の行動の記録から、ある程度実態的に裏付けられることも分かった。

以上から、家譜を手掛かりに関連史料を精査・分析することによって、①王府が主導した王国の自意識が、琉球社会内部（個々人／各地域）でどのように消化され、多様化し、いかなる影響力を持ったのか、②またこの自意識は当時の琉球の国際的立場（中・日への「臣従」）といかなる相関性を有していたのか、といった諸点を明らかにすることが可能になり、近世琉球の自意識の全体像を多角的に解明し得るのではないかという着想に至った。

２．研究の目的

本研究では近世における琉球王国の自意識と中国・日本との国際関係との相関性を多角的に検討することを目的とする。

これにより中国と日本に異なる形で臣従し、そこから生じる諸矛盾に対応しつつも、比較的安定的に両国の狭間に存在し続けた近世琉球の社会構造、ひいては東アジア国際関係の運営・維持の構造の一端を、王国を支える人々の「自意識」の在り方から解明することが、最終的な目標である。

３．研究の方法

（１）家譜史料の整理・分析：未だに十分に研究に活用されていない家譜に着目し、その記載から個々人の自意識を抽出する。またこの自意識の形成・強化と実際の中国・日本との接触・交流・外交の関係性を整理・分析する。なおこの作業には私の近年の基礎的研究（2009～2010 年度の科学研究費による）の成果を活用する。

（２）王府主導の自意識（国家アイデンティティ）の把握：正史をはじめとした王府編纂物や、各種行政文書の分析により、王府が構想・強化した自意識を把握し、それがどのように国内に浸透し、また中国・日本に対して発信されたのかを明らかにする。

（３）個々人の自意識と王府主導の自意識の比較検討：（１）で把握した個々人の自意識と、（２）で把握した王府主導の自意識を比較検討し、両者がどのように関わり合い、また相違しているのかを、その理由とともに考察する。この作業により、琉球（人）の自

意識の変遷（主に強化の過程）を、社会内部の階層差と王国内の地域差を反映させて、全体的かつ多角的に把握する。
（４）＜自意識の強化＞と＜中国・日本への臣従＞の相関性の検討：（１）～（３）で把握した自意識の強化（変遷）と中国・日本との君臣関係の進展の相関性を、近世を通じたタイム・スパンで検討・考察する。
（５）なおそれぞれの成果は、順次、学術論文・学術書および口頭報告の形で国内外に向けて発信する。

４．研究成果

（１）平成23年度は、那覇市歴史文化博物館所蔵の家譜の序文を調査・収集・整理し、中国・日本との関係が反映されているものを抽出する作業を行った。また抽出した序文に対応する家譜本文を検討し、自意識の形成と実際の中国・日本との接触・交流・外交の関係性を考察し、併せて王府が描く自意識との関係性も考察した。

　またそれらの序文と関連史料の内容分析によって得られた成果の一部を、論文二本にまとめ発表した。さらに本研究に深く関わるグレゴリー・スミッツの*Visions of Ryukyu*（ハワイ大学出版会、1998年）を翻訳・出版し、近世琉球の自意識と中国・日本との国際関係の相関について理解を深めた。

（２）平成24年度は、前年度に収集した史料の分析・考察を進めつつ、琉球の王家である尚家の文書群（那覇市歴史文化博物館蔵）の中から関連史料を複製収集した。また研究成果の一部として、自意識の形成と実際の中国・日本との接触・交流・外交の関係性についての考察を含む単著『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館）を刊行した。

（３）平成25年度は、前々・前年度に収集した史料を分析した結果、家譜等の史料に見られる個々人の自意識と、王府が主導した国家的自意識の相関性の内、特に両者の相違（ずれ）に着目するに至ったため、双方の自意識の相関性を身分制を切り口に考察し、成果（口頭報告）として発表した。一方、王国の終焉直前における政治・外交に関わる史料の中に、王国の自意識に関わる記述が多く見られることが判明したので、それらの情報を重点的に整理した。

（４）平成26年度は、過去三年間の研究を総括すべく、これまでに収集した史料類の再検討を行い、その上で総括的な研究成果として論文「東アジア世界のなかの琉球」をまとめた。

（５）本研究の成果全体を見渡した時、特筆すべき点として以下の三点が挙げられる。

　第一は、王府主導の自意識と中・日との関係性を、「御外聞」（国の評判）と「御勤」（国の奉公／国務）という概念に着目して分析した点である。王府は琉球を、小国ながら中・日への御勤を担う国であり、それゆえ軽からざる「御外聞」（国の評判）を有する国であると規定して、家臣団（士）に御勤や御外聞に貢献するような行動の実践および技能・教養の習得を求めていた。これにより王府家臣団には、国家の命運と直結して自らの昇進や功績獲得を目指す意識構造が形成されたが、これこそが＜中国・日本への臣従＞を安定的かつ組織的に維持するための＜自意識の強化＞であり、国家と家臣団の方向性を一元化して王府の求心性を許可するための中・日との関係の政治利用でもあったと言えよう。

　第二は、個々人の自意識が、王府主導の自意識の影響力を強く受けつつも、それと完全には一致しないことを確認した点である。また両者のずれ（個々人の自意識の多様性）は、その個々人（ないしは一族）と中国・日本との関わり方にある程度起因することも指摘した。ただしこれらの点に関して、本研究の成果としては幾つかの事例を示唆するにとどまった。今後より本格的かつ詳細に解明することが課題であると言えよう。

第三に、＜自意識の強化＞と＜中国・日本への臣従＞の相関性を論じた通史「東アジア世界のなかの琉球」をまとめた点である。

この論文では、＜中国・日本への臣従＞の形成・定着の動きが、＜自意識の強化＞にどのように結び付いたのかを、近世初期の王府高官・鄭ドウ（シンニョウ＋同）をめぐる多様な言説を手掛かりに論じ、王府が儒教思想を活用した国家的自意識を追及する中で、王府ではなく一族や子孫が、家譜を用いて鄭ドウを国家的自意識の一要素として位置づけていったことを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 新居洋子、渡辺美季、イギリス船ベナレス号の遭難事件にみる 1872-1873 年の琉球・奄美－英文史料の紹介、歴史と民俗、査読無し、30、2014、pp.283-319
② 渡辺美季、近世琉球の自意識－御勤と御外聞、歴史評論、査読無し、733、2011、pp.71-85

〔学会発表〕（計１件）
① 渡辺美季、渡唐使節中士、農的界定（渡唐使節における士・農の境界）、第 14 届中琉歴史関係国際学術会議、2013 年 11 月 30 日、中央研究院人文社会科学研究中心（台北、台湾）

〔図書〕（計５件）
① 藤井譲治ほか［編］，渡辺美季ほか、岩波書店、岩波講座　日本歴史　第 12 巻、2014、pp.71-106
② 羽田正［編］，杉山清彦，藤田明良，渡辺美季ほか、　東京大学出版会、東アジア海域に漕ぎだす１　海から見た歴史、2013、pp.187-272
③ 渡辺美季、吉川弘文館、近世琉球と中日関係、2012、pp.1-309
④ グレゴリー・スミッツ［著］，渡辺美季［訳］、ぺりかん社、琉球王国の自画像－近世沖縄思想史、2011、pp.1-284
⑤ 村井章介，三谷博［編］，渡辺美季ほか、山川出版社、琉球からみた世界史、2011、pp.91-106

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　美季（WATANABE MIKI）
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：60548642